

文化財を訪ねて

—見てある記—

武村徳松氏が描いた桶川

歴史民俗資料館の展示室の入口には、明治、大正時代の桶川の景色が描かれた水彩画が展示されています。この水彩画を描いたのは、現在も旅館を営んでいらつしやる武村旅館の先々代のご当主、武村徳松氏です。

今回は、資料調査の成果に基づき、武村徳松氏が描いた桶川の風景について、近代絵画の歴史とともに紹介します。

武村徳松氏は、明治23年（1890）板橋区に生まれました。この時代は、ちょうど日本の洋画が勃興した頃にあたります。

それまでの日本では、風景画といえば、観念的な理想郷を描く山水画が中心でした。近代の洋画では、画家自身が目にし、感動した日本の風景をそのまま描くという近代的風景画が始まるのです。

明治30年頃になると、近代日本における「水彩画の父」と呼ばれる大下藤次郎を中心として、水彩画ブームがおこりました。当時中学生であった徳松氏は、大下が創刊した美術雑誌『みづゑ』を師とし、水彩画を専ら独学で描きはじめました。

徳松氏は、東京の都文館中学校を卒業後、明治42年（1909）頃に桶川に移り、武村旅館に入りました。徳松氏は、後年、この頃のことを自ら語っています。

「桶川に来て、友だちもなく、遊ぶ相手もなかったので、町内を回って絵を描いて

いました」（埼玉新聞 昭和45年12月15日）
徳松氏は、当時の水彩画家同様に心打たれる風景を探す「歩く旅」を、ここ桶川で始めたのです。



▶「川田谷荒川」明治41年
岸に接岸する舟は、かつて盛んであった舟運の名残を伝えています。

この流れを受けてか、徳松氏の絵も変わっていきます。明治末期頃の水彩の自然な透明感が薄らいでいき、点描や強い色彩を用いるなどの新たな表現を模索するようになりま

す。

さまざまな技法を模索した徳松氏ですが、大正8年（1919）、村宗旅館（現在・東和銀行

水彩画の普及に努

めた大下藤次郎は、明治44年（1911）に、41歳の若さで没します。この頃、水彩画は劣勢となってい



▶「無題」制作年不詳
武村旅館の向かい側を描いた大正前期の絵と思われる。棒手売（ぼてふり）と自転車が一枚の絵に描かれています。

桶川支店）の絵を描きます。この絵には、試行を重ねた強烈な個性は感じられませんが、徳松氏の澄んだまなざしを感じる事ができます。水彩画の繊細で透明感に終始することなく、けれども油彩画の強烈な色彩と生命感あふれる筆致を前面に出すことありません。



▲「無題」大正8年
桶川宿の伝統を伝えるには、中山道に面して建てることもできません。これらを見ることができません。

この絵からは、ただその季節の描写だけでなく、2月の雲ひとつない青空の清々しい空気が見事に表現され、徳松氏の画業の到達点を示していると感ずるのです。これが、徳松氏がたどりついた独自のスタイル、すなわち「徳松氏における水彩画と油彩画の融合」だったのではないかと感じずにはられません。

また、カメラが一般に普及していない時代。徳松氏が描いた水彩画は、近代桶川の風景を知ることができる貴重な資料です。過ぎ去った時を生きた人々の心の中にしか残っていない桶川の風景が、今も色あせることなく残されています。

※今回ご紹介した風景画全てが展示されているわけはありません。ご了承ください。